



新局玉石童子訓

卷廿五



遠山
127A
190



新編局玉童子訓卷之二十五

東都 曲亭主人人口授編次

第五十五回

鏑箭の短刀暗小擬二郎と陥る
両箇の健宗血と對決場小戦

さてとくから見のそとらうつたひとこらひ
却説韓錦樞二郎の次の日巳の左側小稍睡覚て馳て里の浴室小赴る浴果て
かゝり来て晝飯と果は程小押給へ昨宵の事の趣彼大漢がいつるよと告ぐ
来し短刀と見まれば樞二郎訝と我の人の誂てかゝる物とをりこる。然るとあらざ
昨宵中もどぞ早く告ぐぞと叱るを押給へら笑ひて否昨宵かゝり来まは馳て
告て這短刀と見せまらるるけれも。今告るのかわそよもゆゆと只水とすなぬ
ゆゆの甲斐あるを奴家が庖福小あり程を身の既小睡濃て雖呼も覚ぬるね
只得其處の蚊屋と無て奴家の納戸小宿りは。這短刀ののをも。奴家も心か



から今朝も亦幾回歎呼覚たりけり。心もど方儘も覚ぬれば。
 くらを奴家科小て叱りぬるわと鮮論まを程小擬二郎の遠く着を斂
 め膳と退けて。會抗る錦の囊の長紐を解回して。會半見れば思ふ違を九寸五
 分の短刀で。靴見の白金の鎗前を。愕然と驚くま。且怕れ且怪とて。儘
 押繪小見せり。昨宵這短刀を。何人か歎ちけ。猜しぬれば。是這靴
 の鎗前。當領主の家の花號を。鎗野殿の重寶を。依りし。知る。ね。出處
 不定の物も。一霎時の留置。は。我一句の慎とて。酒を過さ。り。昨
 宵の時八多。強られて。憶を。酩酊。ま。り。今朝も亦貪睡
 くて。今小及び。争何。疾里長小告知。各々。領主小訴稟。人の。倘亦。昨宵の
 大漢。が。来る。と。わ。ひ。誘。て。留。めて。我。還。る。と。俟。ね。り。と。ひ。も。軀。て。衣。裳。と。改
 じ。れ。押。繪。を。採。て。指。差。を。両。刀。腰。小。帶。做。く。彼。短。刀。を。携。へ。遠。く。出。て。く。と。

目送る押繪も胸安らねば。疾。疾。て。か。ら。さ。ぬ。や。と。喃。々。と。の。鼓。耳。の。日。影。を
 届く亭午時候。擬二郎の心と。菅。立。殿。將。て。走。去。け。り。然。る。程。小。韓。錦。擬
 二郎。は。是。日。里。長。許。赴。て。面。談。せ。ま。欲。る。折。ら。他。の。宿。所。小。在。ら。今。朝。新
 部領へ赴けり。俟ぬも。か。の。程。は。と。り。か。り。心。只。管。焦。燥。の。非。如
 長と將て。ま。の。ら。ま。も。鎗。野。殿。史。這。年。來。面。識。と。我。る。小。身。單。へ。も。早
 記を好と。誰。歎。越。訴。と。い。へ。や。と。尋。思。と。ま。退。れ。郡。司。の。館。を。投。て。淺。澤
 隈の頭。中。前。面。より。乘。り。緝。捕。の。頭。人。是。則。別。人。と。も。郡。司。が。家。の。權。豪
 なる。鬼。薊。苛。三。届。梁。之。憶。を。仍。逢。彼。一。人。と。韓。錦。と。見。て。よ。る。彼。逃。と。
 小聲と。俱。小。群。立。緝。捕。の。雜。兵。而。談。ぶ。と。呼。び。て。も。小。十。を。打。振。を。推
 捕。籠。れ。擬。二。郎。の。驚。馬。は。る。此。も。噪。が。ま。何。事。の。在。下。犯。す。罪。も。
 と。の。果。を。苛。三。届。梁。歩。近。つ。ら。ち。向。ひ。と。韓。錦。和。郎。が。罪。の。

我知る所ふあらねども疾刀口捕て参るとある相公の御説と兼りて伏
 兵と俱して参るけるふらねども宿所へ届るふ及びて茲で逢ふ妙なるか
 ら公問廳へ参るとあるとこの公は縦二郎冷笑して在下今身不當て口捕
 覚る一及て訴稟を死一義あり因て里長許赴たり他今宿所在らね我の
 るとも参るとあると此を参るふ及て卒の共侶ふとあるも果て奇三眼
 睜り聲苛立ちとある勿論のるべし卒疾とあるとある一及て鬼刺
 らる俱して公問廳へ参るとあると此を参るふ及て卒の共侶ふとあるも果て奇三眼
 奇三従ふ伏兵等と共侶の韓錦縦二郎と郡司の館ふ俱して参る問注廳
 へと誘引小局の内圍りければ縦二郎の訝とて杖をかちてありは程障子の
 内小聲高くなると韓錦韓錦と呼正しく靴的ならんと思ふ縦二郎は何
 應て杖を寄きききける局の内小布儲る沙磔の中小釣索あり憶ふ

脚を膝とそ忽地撞と顔が鬼刺が伏兵とさるは無き幕の蔭
 よも侯設ける雑兵等吐と嘔て幾名疾走出折累りて起んと掙
 扎縦二郎のよと捉脚を押へ索を拭ききける縦二郎の猶寄立と
 臥る脚を掙きき一霎時の挑たなければ其頭準備あり九尺階
 子を投掛らるる。壓水の拭て動さね力及び結加れり。あまとも縦二郎の單
 怨の堪ざれば連の罵狂ひと奇三猶怕れて幾十斤を杖を拭て伏兵守
 らる韓錦の轉ひし時捨たる短刀と合揚る。彼が帯を両刀と俱に廳の櫓
 廊へ並置り意氣揚々と豫仰付れり。次見韓錦縦二郎の捕捕ゆらあ
 り人々稟一のと聲高やう喚りける登時司者あるて奴と用く障子
 の内と見え六廳の上坐小鏡野郡司靴的の縹緋家の花號漆做した信
 濃織る麻衣の長袴と穿下まろ小刀を腰小帯てる中啓の扇子と

採りて立る案と引寄り。端然として坐たりける。左右の従ふ有司の毎毎
 持隈八刺高を首めて老るる弱はあり。開が中隈八額と衝身と起きて
 彼短刀と合抗て王君小呈関あてけり。靴的のやと受合を。裏と解せ
 見る程の苛三と遠く。檐廊の升来て王君小告稟せり。御前御意と承
 せり。臣等伏兵を従て盗見擬二郎と搦捕んと他が宿所へ赴く程およ
 く途お逢ひ見る。彼奴が竊合たる。鎗前の短刀と懐中秘持され
 搦捕も思ひかども。彼奴も夢えり。猛者人捕逃さるるを。と思ひかへ
 あり。暴立を。儘俱して。當廳多局の内。誰入れ力と勅を。
 稍口捕ていと言。誇貌小せえ上。繩合の伏兵も。擬二郎と牽立る。
 檐の下を推居ける。靴的是と。ちて案と極遣る。擬二郎と疾視て。盗
 見思知るや。這鎗前の短刀の千金も。換が我家の什物なる。御高

你が我館へ来り比より紛失して久き。案れもあてなけれ。原來竊る者
 あり。と思ひ。堪能る。周易者流。占問ひ。亦正可。你が所為と
 報ふよ。誣言を。人うち見よ。現然るもの。は。人への
 苛三も。課せ。その身。召捕せ。果して。這短刀。懐中を。と。い
 向いでも。知る。竊盗の罪科。左も右も。逃る方。速に首伏せ。呵責は
 公台と。實ま。早く。い。と。敦圍。猛く。譴問。を。擬二郎。へ。怕る。色
 ぢ。聲。高。や。る。合。る。も。その。宣。不。と。ら。然。る。証。と。誰。か。美。ん。を。故。に。如。此
 如此。箇。様。々。の。とい。と。昨。宵。擬。二。郎。が。家。に。在。ら。ざ。り。時。見。も。知。ら。ぬ。大。漢。の
 件の。短。刀。と。て。来。不。け。その。事。の。首。より。女。弟。押。繪。が。生。た。る。趣。擬。二。郎。の。歸。宅。の
 後。稍。少。知。る。顛。末。と。具。陳。て。又。の。申。す。小。可。事。の。怪。死。を。知。ら。ざる。あ。ら。ね。も。
 今朝。宿。酒。の。醒。めて。遅。く。起。出。ら。れ。ば。告。訴。延。引。せ。の。から。然。れ。ば。と。ら

も閣下。今日も午の貝吹時候件の短刀を携て里長許赴けし他も亦外
 出で在宿せむとせしむる時。後れんとの惜て身單にも御館へ参りて
 さまじ思ひ。急ぎて来る路の程。波澤隈の頭を御家臣鬼刺生に逢しより
 事の茲及ぶる。憶ふ我等を悪む者不測の罪に陥さん。謀りたるをゆい
 らせも果を軌的の眼を瞋し聲苛立て。黙れ盗見勇悍。と世話も此の這奴
 ぐへ照据と取られてせん方。不見の知らぬ大漢。この短刀をめて来た。巧小頼
 陳るとも。其大漢と生拘て共侶の牽りて来た。孰れ実事と思ん。這奴緊
 多く責懲さ。必招了ま。苛之早く谷と中。と烈に下知の届梁も
 美りぬと心々。檐廊より走下て伏兵。下知と傳て。韓錦と推伏て。谷と中
 まくおれども。樞二郎の身を反しく敢其杖と受を連り。不究と叫ぶ。事果
 ぐもあらざれば。隈八も見ふ。堪む請を。下立て。苛之と共侶。伏兵も

罵搦ま。く。稍樞二郎と推伏。せて中。谷と先度の怨彼坐角力の輪腹。今
 愈ま。と。の。ぬ。り。の。烈。に。呵。責。の。幾。百。杖。數。も。涯。も。那。麻。與。美。の。腕。の。骨。の
 續く。まで。透。も。あ。ら。せ。む。樞。せ。か。憐。む。樞。二。郎。皮。破。れ。鮮。血。流。れ。て。息。絶。え
 と。あ。て。け。れ。ば。軌。的。の。台。と。休。め。さ。す。其。奴。素。より。強。情。を。早。首。伏。ま。さ。す。
 異。日。又。復。拷。問。せ。ん。と。終。獄。舎。係。ぐ。べ。と。の。苛。之。隈。八。と。心。と。あ。つ。伏。兵。も
 下。知。と。傳。へ。樞。二。郎。水。を。飲。せ。る。と。せ。か。姑。早。く。樞。二。郎。我。を。復。り。て。嗟。嘆。小。堪。む。
 苛。之。等。と。見。か。つ。て。若。們。と。是。半。首。の。小。人。の。か。い。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。好。侮。の。善
 者。と。誣。く。不。測。の。罪。に。陥。も。者。和。漢。今。昔。勘。ら。ら。む。彼。文。王。の。姜。里。の。囚。と。孔
 子。の。陳。蔡。の。苦。し。ゆ。ら。る。遊。莫。盜。賊。の。惡。名。を。負。せ。ら。ま。さ。る。と。の。事。を。我。ら
 是。清。白。の。勇。士。一。日。も。元。と。喪。ふ。と。と。思。れ。ま。今。這。呵。責。の。苦。痛。小。怕。れ。知。ら
 ざる。と。の。あ。り。と。言。ん。や。只。冤。小。死。ん。の。事。を。と。と。言。と。止。む。猶。樞。ま。と。の。事。を。

苛之至るゆね態しく信奴執心も浮きされば疾牽立よといそむの伏兵を
 阿と応てのるゝと角小樅二郎を辛く推立り前後左右を守りて
 多く獄舎へ移り置けり。余る程小樅二郎の冤屈の厄小囚にて是より單獄全
 居りかたべと豫より人あも知るや自真弓張緊し心弛とてや背小受り杖瘡
 當晩甚しく痛む心地死ぬ覚か忽地と思ふ。曩に我仙丹大江峯
 張小乞ひしより外小折れ見小程しく髪裏小斂めたり然ると今日冤の公不酷
 小樅と折れ猶幸小く髪断離とせし故の儘るま彼仙丹の必あらん
 今尙是を用いませ孰の時と候とと吐小問吐小谷々。軀て頭髪裏と探る
 果しく彼見小かち戴せり蓋小開て接と聊嘗試る小心地立的小清
 爽小るの程小氣力も俱小本復しく背の疼痛も覚むるぬ這仙丹の即效
 神妙今さら敬馬く可れ且飲ひ且感嘆しく猶其半分と嘗へ乗る唾吐

めて解寛めく指小除け背の瘡小屈限り幾番塗上り者半响許指
 の届ぬ處への薬汁あつら流傳を療治小限やうりけん其杖瘡一夜の間
 餘波もあらま比皆愈て痕小見えをるのけりかるべと知りもな死軀的
 その次の日小苛之を召よせ韓錦奴のふるりん台の苦痛小堪むと昨宵
 死したるゆねあらんぞらといふを苛之はあま不否今朝死て見ひし小樅二郎の故の儘
 中々氣力毫も衰へむ杖瘡の比自愈て痕小あらざるのいぬ怪有るのいぬ
 ぞと告る小軀的呆果とぞ訝したる小こと我みづる檢ま疾牽出せ
 といそむの苛之再議及ぶ軀て獄卒小下知と傳て樅二郎小祖せ且
 重索と緊糸あく掛る局の内小牽入る小軀的の廳の檐廊小立々孰と
 是と相小果しく苛之告小違む樅二郎の爽然たる面色生平小異るも
 杖瘡もあつらるる郡司主僕と罵る威勢の猛かれば軀的直と

呆惑あり。是日公の教を増て殊小緊く捷せしかも。樅二郎は今日牽
出さる時。消地小仙丹と背小塗き。口中も嘔き。かか台を受ても疼痛と覺
む皮肉の破るるも。さけ只宛と叫ぶ。呵責をの甲斐あると。さければ。苛二
ら。あつちも。あら。乾的。又。見術と知らぬ。這奴于吉左慈の如く。妙なる幻術ある
者。汝倘秘で走らせらる。も。また大事るべし。是より。後。拷問せ。三重牢。必龍
在る。各。驗者。課せて。厭勝の秘符を。獄に貼せ。さ。ごと。由縁。成者の願ふも。
飯と獄舎へ。餽ると。饒さ。只獄卒の。数と増て。夜と。日と。守り。せ。か。
樅二郎は。幸い。呵責の。台と。逸れて。安全と。して。日と。送り。けり。休題。是時。韓錦の
宿所。昨日。樅二郎が。彼短刀と。携りて。里長へ。を。必。せ。り。久。く。る。ま。で。か。り
来され。押給。ハ。單胸。安。く。を。い。ふ。く。と。俟。程。小。長。は。百。餘。日。教。じて。下。晡。み。か。り
時候。外面。不。覺。然。と。脚。音。を。さ。る。れ。あ。ら。り。時。八。と。奈。我。四。郎。と。ち。連。空。で。走。り

ま。ち。押。給。と。片。隅。小。招。を。さ。き。樅。二。郎。が。禁。獄。せ。り。机。事。の。趣。云。云。と。方。僅。一
と。告。が。押。給。ハ。坂。馬。は。且。憂。ひ。て。原。來。彼。短。刀。の。祟。小。を。あ。り。し。め。其。故。の。箇。様
箇。様。如。此。々。々。の。事。の。り。と。昨。宵。一。箇。の。大。漢。が。彼。短。刀。を。て。来。り。け。り。その。事。の。始
よ。る。御。向。小。樅。二。郎。の。件。の。義。を。里。長。小。告。て。訴。禀。ん。と。彼。短。刀。と。携。り。て。出。て。あ。れ。け。り
と。ま。で。の。詞。急。迫。く。説。示。せ。ば。時。八。と。奈。我。四。郎。は。さ。々。と。嗟。嘆。ま。る。の。計。の。出。る。所。を
知ら。ぬ。當。下。押。給。ハ。又。い。か。う。お。た。く。大。江。主。僕。ハ。防。守。更。若。と。共。侶。小。妙。義。へ。と。く
立。去。り。の。い。よ。り。仲。兄。を。り。み。さ。ま。ま。か。の。来。され。何。せ。術。の。奴。家。が。身。單。智
計。を。借。る。所。由。も。う。作。心。い。う。せ。ん。と。さ。り。小。困。と。額。と。病。を。れ。時。八。と。奈。我。四。郎。の
憶。を。膝。と。打。鳴。ら。り。開。か。て。思。合。ま。れ。我。師。を。怨。る。者。あ。り。て。謀。り。て。罪。小。陥。ん
と。て。彼。福。害。と。賣。り。る。ら。ん。と。思。へ。も。我。們。ハ。世。話。小。下。司。の。計。也。非。如。一。年
三。五。箇。月。考。たり。とも。休。小。似。れ。長。詮。議。し。く。あ。ら。ん。よ。り。八。重。作。哥。々。と。呼。か。ら。し。く。

三十五 三十一 川 七 文 堂 堂 堂 堂



健宗落魂て
 途小範的小
 訴ふ

三石山三石山三石山

高量たかひらまるふあくとあり下くだ然しかれがとて我われ們われら兩箇りょうくわんが俱とも妙義めうぎへむくら留とど守まもり安やす危あやし
 心許こころをる。奈我なわれ四郎しろうがや我われも之これ後あとの時とき八はちを推おし禁かぎめて奈我なわれ四郎しろうがや
 義ぎへ我われも時とき八はち和わぬ一ひと里り長なが刀や祿ろくとよ高量たかひらと整ととのへ。明日あしたより獄ごく舎しやへ飯いと
 餽くわんる准備じゆんびを緊要きんやうするら。今日けふの既すで暮くるふ近ちから。咱われらの明日あした未明みへいより單ひと妙
 義ぎへ赴おもむて八重やえ作しやう哥かと相あひ俱ぐして大後おほご日ひの必かなかへるまで。妹いもの今いまも消き息そくを書か
 写あめ渡わたしぬ咱われらの宿しゆく所しよへ走はりかへて點燭てんじやく時とき候ころふ又また來きりてとて身み起た
 程ほど小里せうり長ながの四隣しりんる屋や主しゆを相あ伴ばんして呼よび高たか訪ほうる。航かうて母屋ははやら
 升のぼり押おし給たまふ向むかひて。韓錦かんきん主しゆの不慮ふりょの災難さいなん這里こゝも早はやく覺さえらるん
 響ひびく御領ごりやう主しゆ様さまより下知げちの咱われらと故老こらう達たちを召よせさる。則すなはち仰おほ渡わたさる
 中なか。樞しゆ二に郎らうの罪つみ如此ごとく々ごとく目め今いま禁獄きんごくある他ほかが贓罪ざんざい輕かろくね由縁よしづの者もの
 願ねがふも飯いと獄ごく舎しやへ餽くわんると饒にと。樞しゆ二に郎らうが宿しゆく所しよへ五保ごほを送おく代しろ日ひ夜やく

守まもるべ。樞しゆ二に郎らうの弟あに八重やえ作しやうの四し五ご日にち旅たび小在せうざいのと秋あきの歸かへ宅たくの日ひ訟そう稟りやうし祿ろく
 その餘あま同宿どうしゆくの男おとこ女めあら。留とどめて一箇ひとくわんも散ちまへ。其そのの長ながを佐さと守まもりねと樞しゆ
 せのひゆた因よ今いま未明みへい時とき這人こゝろ々ごとく商量しやうりやうある。女流にょりゆう一箇ひとくわんの宿しゆくの男おとこ子こ夜や
 番ばんの憚たりあり。夜分よまの家か々ごとく衆しゆとをまへ。今いまもあはれねども時とき八はち奈我なわれ四し相しやう資して
 やへさくあふき。呼よびかま脚力けつりきといをね。の四隣しりんの亭主ていしゆも共とも口誼くちぎと舒ゆる託たくて
 八重やえ作しやう哥かと呼よびかま脚力けつりきといをね。の四隣しりんの亭主ていしゆも共とも口誼くちぎと舒ゆる託たくて
 又また出直いでちくとまへ。と齊いっ一いつ里り長ながも共とも侶りやうとて退ひの。是こゝろより後あと韓錦かんきんの武藝ぶぎ
 角觥かくかうの弟子でし訪ほうる。甲夜けつや過するまで混雜こんざつ涯やらける。浩かり程ほど小鶴せうかく脛しん奈
 我われ四郎しろうの當晚たうゑん押給おし小消せう息そくを受令うけいて宿所しゆくしよへ退ひりて遠とほく。仍い装まと整ととのてその
 詰朝じつちやう未明みへいより妙義めうぎを投なて立出たちけり。案下あんげ再說さいせつ。余ある程ほど假健かけん宗そう小雲せううん天てんの
 曩なの軌き的てきの薦せんめら。彼か奸計けんけい行なれて。剛ごうな。樞しゆ二に郎らうの脆ひそく獄ごく舎しやへ係かれり。是こゝろ
 是こゝろを一箇ひとくわんの功こうふと。盤纏ばんぜんとをい。思おもひ。大刀おほや自みづから軌き的てきの。又また武者むしや修しゆ行ぎやうの

願ひのいそ路費二百両と云ふのら主人母子の諾を俱に禁ると前の如く放
 遣へどもあらざれば小雪太のく困る。是上は是非及ぶ折と現ひ有財を竊
 合く走らばやと腹の尋思と云ふのいそ便と云ふけ。人の暗慾の同トがね
 と不義の情願相似。鏑野郡司の軈的のいそ日盗見十六郎の機密と課さる
 より彼短刀の一條の立地の事成り憎しと思ふ。旋二郎と輒く陥れさる。その
 餘のいそいそ日屬思と云ふ少女抜るいそいそ十六郎はいそいそ
 便と云ふ。今日までも信る他力及びむと。逃て他郷へ走りぬらむ。
 這里でりのと思へより我みづら立坐る。巷街の風聞も撈る。抜る所
 在を穿鑿金やと尋思と云ふ其次の日小馬上優小打扮て鍼持隈八刺
 高と腹心の若黨之四名と雜兵奴隸を従へ。自平月雨霽一亭午の時
 候部領の里と東西と云ふ。うち巡り檢儘小潜りの編みも深し思ひ人知

らぬ淺澤隈を過る程。沼の水際の花時知り。親小咲出る。その世帯の
 朱も奪可の長視小ある。軈的一霎時馬と駐めて水と飼せてあけり。
 這塘隈る松林陰より忽焉とて一箇の乞兒を馬前小跪て。京上公事
 あそひのを聞召れよと云ふ。訝る軈的主僕のあそ何事と。と太り小齊一佐と
 見られ。十六七歳る少年。海松の如く乱れる額髪。鼻も垂し。汗
 抗る。障小又よく見れば。日黒たる面貌。兇悪の者小似て。身小榜の破れ。汗
 衫の外小被物も。繩と云ふ帯と云ふ。沙柄杓を腰小。蜈蚣の像小。穿敗
 たる草鞋の底。抜て身小引添。菅の立風。芭蕉の蟬。圍小似る。世に
 劍被と唱ふ。伊勢皇大神宮の大麻と挿夾。背小裏は色と。野
 實小怪。訴人小ある。軈的馬の鏡面と。軈て其方へ推向て刺高仔
 細と詰と。下知小従ふ。鍼持隈八。杖出。件の乞兒小打向。佐と。睨て。休原

是那果者何名之故。膽太も守不直訴仕る願わ疾直告せり。見の羞る色あり。ゆるやくふく。然い今。名告。稟き。面伏され。小可。近江。觀音寺殿の權臣。曾根見五郎平宗玄の弟。曾根見位六郎健宗。是。鑄野殿の。為。從母兄弟。路遠。見參。せられ。我名。知ら。斯。當所。呻吟。原。是。仔細。身。黃。綠。禍。鬼。の。出。崇。方。其。其。始。告。ま。ら。ん。言。の。一。朝。聲。が。り。御。領。俱。肝。胆。吐。秘。密。成。明。と。疑。ひ。を。解。つ。い。と。庶。我。を。軈。的。ゆ。冷。笑。ひ。て。噫。最。鈍。は。慥。見。か。刺。高。も。知。る。如。く。その。位。六。健。宗。日。既。我。館。未。今。猶。宿。野。在。離。鬼。病。る。者。何。を。兩。箇。の。健。宗。や。贖。物。を。知。る。世。同。姓。同。名。の。者。と。見。ら。ち。又。隈。八。打。向。今。の。御。誕。の。る。る。世。同。姓。同。名。の。者。

これらふあらねども。觀音寺の城内。曾根見五健宗と喚れ。我外亦あ。る。く。も。い。然。る。と。名。を。竊。と。主。と。欺。て。御。庇。寓。ま。欲。さ。る。わ。狐。狸。の。所。為。る。奴。と。對。決。さ。り。聽。せ。ら。立。地。小。玉。石。分。明。さ。る。謀。り。て。紛。末。ゆ。る。所。詮。其。睜。り。聲。苛。立。き。開。る。勿。論。の。か。刺。高。其。奴。腰。纏。搦。牽。り。て。先。母。の。大。刀。自。あ。り。け。今。日。の。奇。事。と。固。様。々。と。叫。告。て。衣。裳。を。改。め。有。司。三。名。を。從。へ。金。く。回。注。聽。へ。出。る。程。小。銀。持。隈。八。刺。高。の。雜。兵。等。と。共。偈。腰。纏。搦。る。と。見。健。宗。と。局。の。内。牽。入。り。て。檐。廊。近。く。推。居。る。當。下。軈。的。位。と。見。て。名。を。見。頭。と。拾。上。の。事。も。知。る。と。ら。我。母。刀。自。の。怪。の。け。觀。音。寺。

伍六健宗の早業訪来て我家小在り然るも伍六郎健宗と名告れども正丁の照
据あるとす。且前小ある健宗の其女兄窓井の消息あり開が齋願したる。鑄金前の短
刀の況實の健宗たる者其身不測の罪ありて近江と追放せられたることも乞見ふ
るも令落て這頭と徘徊もあらず縦令呻吟來りとも我家と訪せせ。
我外小出るも現きて中途小愁訴あるも。裕と云恰と云疑ふく信ぎるは淺は伎
倆の顛末と招了致せ甚麼をぞ。聲高やふ詰れども健宗阿容たほ色もわく。
開る宜ふところから相公の只其一と知りていもその二と知りぬる目今宜ふ吉の趣
よりと咱等既小曉らるる健宗と偽名告て御館小逗留ある者我兄五
郎平宗去の故の鞋奴小雪太と喚做したる惡物小こゝろの故の箇様々々如
此如此の更いと今茲四月下浣健宗死罪と宥免れて近江を追放せられ折
女兄窓井の密使とて衣裳短刀金二百兩と小母御前へ寄すありける消息一

封と贈らるる是より健宗の這地と投て來り程の召俱一は鞋奴小雪
太小哄誘されて美濃の野上小杖と駐り色小迷ひ酒小浮れて逗留くありけ
程有一宵件の小雪太健宗が酔臥すと現え且る衣裳兩刀と般纏の九
十餘金とて女兄窓井の消息と藏りたる鼻紙書表小至るも此編合りて
逐電あるも其の顛末と陳果て亦いさ。彼時右の造化され跡小残る我身
の土妓娼婦の洞房錢を逆旅主人小債られて出らせぬ術あるとされし身着
たる夾衣帯も汗衫も剥合られて赤裸を追出される。其折の朽惜く又いへくも
いへき活るおちも邂逅小祐る神のあれも件の客店小老母あり絶く他が好意を
その敗る榜の汗衫と被よと惜地小親か。僅小肌膚と掩ふる目足より後八里
人の門小立て糧とてい路も客の袖小携りて一錢の施とていへも親を自取稀めて
邪慳の杖小追拂と書以錢て路も啗は夜ハ亦露路宿と常ふるも目生と感死

五石堂三言卷二五
十二

草臥露をそそち雨濡て逆旅不苦日を送る艱難言ふ物も本
 月の初旬當所山りあられも今さらか身ふるも御館へ推参るも
 あらね部領の里又日を送り情地便宜と俵ける今日も相公の
 聞早くはるは是るべと思ひ身は浅すは浅澤のつみねる一期
 忍びて御馬前愁訴の本意と遂これ女兒窓井のおる彼短刀の
 小雪太奴穴竊去らま正照据あまれば推て見参るも疑るも
 らまと思ひ難ては死のを察しぬかかと言言がきく陳れ乾的
 ちて半信半疑の露をそそち齊ね呵々とも見休が陳る所も
 せわれも機変ふ劇て詭譎と巧ふ做ま者世も今一人の照据
 り所と實と漫ふ真偽を執失人や寧真の健宗と呼出く目物
 折言と易るるといふ健宗毫も擬議せむ開ら希ふ所早く對決

と合る間乾的の箇の有司と見え健宗召といをが阿といら
 然る程假健宗小雪太の武者修行の假托て大刀自も乾的の
 金とける其言聽るべくもあらざればの上是非及む主人母子
 金を穴竊合て走る不如何尋思と情地便宜と現る程是日乾
 市中檢見の爲とそ從者多く從へ既中これ宿所在ら大刀自
 四下人のあるとりけれ小雪太の折をぬらと馳て納戸小潜入
 金五十兩と竊合りて懐小錠と夾め已子合小退せと肚裏思
 足らねども合破敗の其本を今宵這頭火を放ちて事の紛れ
 やと單計較程も乾的有司と使とて問注廳へそ口甘けれ小雪
 推辭へあらざれば忙し袴と穿ちて中刀と腰あつ脩刀を引提
 乾的は是くと馳て側小招寄て却りや咱も御市中と巡臨見を

浅澤隄の頭を。一箇の少年と見あり。他みづう近江の曾根見佐六郎健
 宗と名告て愁訴あるより。あれも其為体怪けれ。腰纏と拭きて牽せ
 方儘の来り既小繫く。詢問きけ。小隨即他。陳る所首の箇様より。尾の
 又如此々々有徳。真偽惑乱と我疑ひと解由る。和殿彼奴を知りた。疾と向
 れて小雪太吐嗟とむる。胸小鍼刺心地まれ。毫も色あ見な。冷笑ひく。
 其奴の量。美濃路まで我召俱。たる鞋奴小雪太と喚做る。奴ら他も觀
 音寺の城内に在り。時我兄宗宗の縁坐を久く獄舎敷されて俱追放せられ
 然。咱等佛心どりて艱苦の中。召俱して。美濃路まで來りける。彼奴の恩を仇
 として。我らも。我盤纏と竊合りて逐電を。然れが天罰を。見おれ。我
 身を。今落て這頭へ呻吟來りける。儘。我身の相。御座依り。安知る。我知
 り。左に。右に。われ。咱等。其兒の自筆の消息。彼短刀。齋厨。たま。同

ても真偽の紛明なる人迷。小我名を竊と。又仇せ。故する憎む。畢竟
 狂人の沙汰。取る不足らる。尊公御意ある懸られ。誠を。説
 誇れ。軌的。點頭。趣定。故あり。然ら。目今。對決。人の惑ひ。解糸。か
 卒。と。い。せ。小雪太。已。と。ぬ。乘り。心。て。刀。引。提。徐。廳。の。檐。廊。お
 出。健。宗。と。位。と。見。て。這。惡。僕。が。膽。太。一。我。小。對。ひ。猶。伴。る。と。い。せ。果。を。健
 宗。の。眼。と。瞋。一。齒。と。切。り。て。類。稀。る。賊。僕。小。雪。太。你。の。美。濃。の。野。上。也。我。を。裸
 體。小。做。ま。そ。物。皆。竊。と。逐。電。を。る。飽。む。猶。且。我。名。を。竊。と。早。先。立。ま。さ。ぬ。不
 來。て。小。母。御。前。親。子。と。惑。し。て。情。地。の。榮。利。を。謀。る。と。我。出。來。れ。脱。る。路。あり。
 你。が。支。の。照。据。小。ある。我。其。兄。の。消。息。と。彼。短。刀。の。美。濃。路。也。你。が。竊。と。物。る。小
 這。頭。小。知。る。人。あ。る。と。き。れ。が。我。を。誣。ま。さ。る。と。母。も。果。を。小。雪。太。の。呵。と。冷。笑。ひ。
 黙。れ。惡。僕。舌。長。一。炭。と。り。て。雪。と。做。と。我。の。件。の。證。据。あり。你。の。言。も。證。据。あり。

誑佯と知るべし。健宗聲高なり。證據の條が竊なる。彼短刀と消息
 る。と云ふ。小雪太推林。我齋。た彼種。條證據ある。鳥詩。言と打
 笑。健宗の性起て連。罵。争。果。つ。鐵持。限。八。找。出。雙
 方。林。示。ゆ。西。箇。健宗。鎮。の。送。不。左。実。と。争。ふ。も。彼。身。近。江。在。り。時
 より。その。面。影。と。認。り。た。者。這。頭。一。人。も。あ。る。け。れ。ば。鄙。語。云。水。滌。論。也。孰。快
 よ。是。と。辨。え。縦。照。据。の。あ。ら。ば。も。文。武。の。本。事。さ。ら。ば。や。と。い。れ。て。健宗。沈。吟。と。助
 言。寔。不。其。理。あり。开。き。目。今。思。ひ。出。り。彼。假。健宗。小雪。太。素。よ。是。無。筆。也。
 假。名。文。ご。も。讀。と。要。せ。曾。根。見。の。觀。音。寺。の。權。臣。の。弟。健宗
 が。無。筆。さ。る。べ。し。今。試。の。紙。筆。を。授。け。何。れ。書。せ。め。と。い。れ。て。小雪。太。故。馬。と。い。て
 且。と。條。の。傲。ん。先。我。武。藝。と。見。知。せ。覺。期。と。せ。と。敦。園。猛。く。身。と。跳。せ。と。檐
 廊。より。投。る。像。く。飛。下。と。刀。と。拔。て。研。と。ま。る。と。健宗。透。さ。身。と。及。と。鈎。上。楚。と

合。留。て。柵。放。さ。ま。く。あ。て。け。は。小雪。太。の。命。と。送。不。角。不。留。舎。と。健宗。が。腰。纏。の
 忽。地。弗。と。断。離。れ。た。健宗。進。退。自。由。と。捉。る。隨。不。毫。も。緩。左。の。卷。と。掃
 走。眉。間。と。礮。と。撲。け。た。小雪。太。の。呀。と。と。り。腕。く。刀。と。拵。合。れ。て。又。中。刀。と。拔。き。ま。る。那
 時。遲。し。這。時。速。健宗。の。前。聲。を。か。け。振。是。光。の。電。光。天。雷。觀。面。小雪。太。の。首。と
 撲。地。と。敷。る。落。さ。れ。て。軀。も。俱。不。仕。け。り。思。ひ。か。け。る。光。京。の。敬。馬。噪。く。隈。八。有。司。名。彼
 逃。ま。る。と。言。散。動。め。ら。俱。不。驚。馬。く。雜。兵。每。群。立。蒐。り。て。前。後。より。悄。健宗。と。組。結。て
 及。と。奪。と。と。牛。々。と。押。を。索。と。楯。け。る。當。下。靴。的。怒。り。不。堪。と。勃。然。と。聲。耳。震。と。て
 噫。根。藉。る。懸。危。見。か。る。對。決。の。紛。明。ら。ぬ。機。不。臨。と。又。と。奪。と。之。切。敵。と。と
 斫。殺。と。し。質。物。と。と。疑。ひ。る。疾。目。前。牽。中。ね。我。か。り。と。多。敷。ふ。と。死。と。健
 宗。の。怨。と。雪。ん。早。く。せ。ま。や。と。焦。燥。け。ら。部。領。の。大。刀。自。件。の。西。箇。の。健宗。の。對。決
 の。云。云。と。方。僅。人。傳。不。笑。と。心。許。る。や。思。ひ。け。悄。地。向。注。廳。へ。去。る。屏。風。の



三石重三言卷三五

三石重三言卷三五

陰謀を以て竊聞して在り。然る今軌的が健宗を殺せんと欲圍むを嘆
 嘆とせし聲と低め却り。見身の思ふや彼を兎の進止武藝の本事
 あると思へ。贖物との定めざる。尙真の健宗を殺し悔も及んや。姑且獄舎
 敷き置て近江使使遣り。密井不就て健宗の相貌音聲身材を詳知
 する。両箇の健宗孰の真孰の贖と紛明せん。憐る要る。其を
 軌的の領領。奶々の教訓誠の鬼薊苳三隊の雜兵。飛禽疾四郎
 稻妻齒四郎と喚做す者あり。彼等神妙の達者也。百里と六日往還を以
 て近江火急の脚刀。究竟の兵毎を。明日未明。起つて窓井遣り消
 息との。あゝといふ。大刀自の有理と応て。馳後堂へ退りける。是より軌
 的の。隈八。下知。我復思ふ。あれ彼を見。權且助けて。後亦
 せん。術あり。獄舎。敷き。置。と。隈八。下知。と。雜兵。不。傳。は。

健宗と牽立させ。獄舎とを遣り。然る程軌的の鬼薊苳を召させ。
 近江火急の使の。如此々と吩咐却自餘の雜兵。假健宗の亡骸。其甲寺
 へ送れ。執斂めさせ。其亡骸の懐より圓金五十兩。軌的の復誣り。
 件の金。開き。後堂へ。母の大刀。自告げ。大刀自。亦驚怪。
 原来健宗武者修の願稱。怨め。故。た。他。素。より。五十金。
 貯録。ある。納。婢。吩咐。財用。見。納。戸。小。章。
 旨。納。れる。金。五十兩。ある。大刀。自。軌的。の。愛。敬。失。果。て。假。健宗。
 憎し。思。無。明。の。醉。の。醒。果。ね。か。も。真。偽。を。定。め。近江。の。密。井。の。回。翰。
 先。の。俟。小。あ。く。と。そ。が。儘。小。日。を。送。り。け。畢。竟。樞。二。郎。と。伍。六。健宗。と。善。悪。邪。正。
 異なる。其。窮。厄。の。相。似。る。後。の。安。危。甚。麼。と。開。下。回。解。分。を。聽。ね。り。
 新局玉石童子訓卷之二十五終 (打田)

